

CONTENTS

拠点病院アンケート調査をふりかえって ..... 1  
 当事者参加型プロジェクト HIV Futures ..... 2  
 「239人の HIV 陽性者が体験した検査と告知」 ..... 3  
 日本エイズ学会参加支援スカラシップ ..... 3  
 「HIV 陽性者のための勉強会」報告 ..... 3  
 新プロジェクト「Talking about SEX」 ..... 4  
 from friends of + エイズ記念日 ..... 4  
 これからの活動予定 ..... 4

## エイズ治療拠点病院 アンケート調査をふりかえって



HIV 陽性者への情報提供の一環として、2010年、JaNP+ では全国のエイズ治療拠点病院に対しアンケート調査を実施しました。この調査から見てきたこと、今後の HIV 診療の課題とは…?

### 当たり前が当たり前ができない

長く生きられるということは、居住地が変わることも、他に様々な怪我や病気を経験することも「当たり前」なら、基本的な感染症対策さえあれば、どこの病院でも診てもらえるのも「当たり前」だと思う。しかし今回の調査は、そんな当たり前のことを当たり前ができない疾患であることを再認識する結果となった。

HIV・AIDS の治療については、ブロック拠点病院等の一部の医療機関に患者が集中している状況が「当たり前」になっており、近い将来にパンクしないのか危惧せざるを得ない。また、回答のあった拠点病院(374件中225件)のうち、何らかの診療科において HIV 陽性者への治療提供について「(診療科はあるが)不可」と回答した拠点病院は33%にのぼり、同じく「当該科がない」とした拠点病院も55%であった。医療機関における差別的な対応や診療拒否といった事例を持ち出すまでもなく、HIV・AIDS 以外の病気や怪我になった多くの陽性者が一般医療機関を受診するには、相当の覚悟と勇気が必要なのである。そして、こうした現状に対して、少なくとも拠点病院ならば HIV 関連の教育・研修等を継続的に行う必要があるはずだが、回答のあったうち35%は過去3年間に研修を実施していない。

一方で、回答があった拠点病院のうち約半数では、HIV 患者数30人以下であった。地域により患者数が異なり一概には言えないが、こうした拠点病院に通院する陽性者に、患者数の多い拠点病院の患者が「当たり前」に得ているような情報が届いているのか、考えさせられる。

### 拠点病院がめざすものは…

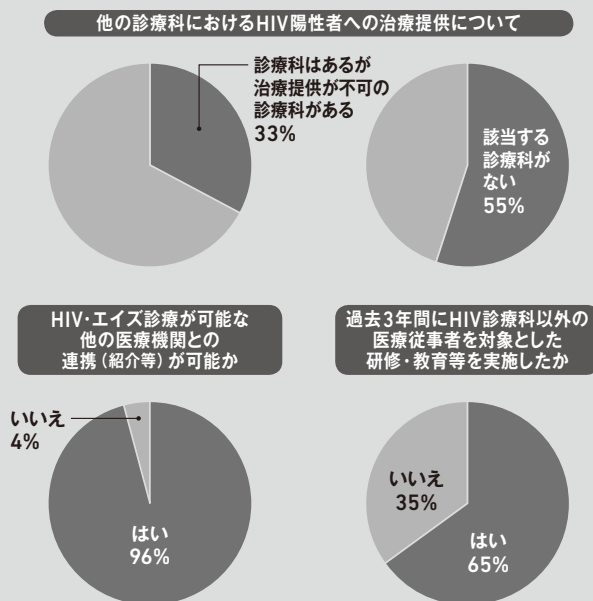
HIVに限らず、患者が一定の専門性がある医療機関を選ぶのは「当たり前」であり、例えば患者個人が一極集中のもたらす弊害について知ったとしても、診療経験の少ない医療機関をわざわざ選択する可能性は低い。しかし、一定の診療レベルと、何よりも差別・偏見がないことが担保されていると分かれば、より身近な医療機関を選ぶことは十分に考えられる。

昨年11月に開催された日本エイズ学会では、一般医療機関や福祉施設との連携に関する研究や取り組みがいくつか発表されていたように、決して閉塞的な状況ではない。私たちの活動の中でも、HIV につい

て数多くの感染症の1つとしてフラットに受け止めている医療従事者や医学生は多いという実感もある。肝心なのは、こうした前向きな要素をどう上手く活かし、つないでいけるかどうかだ。

HIV 陽性者への医療提供のロールモデルを目指すという意味で、エイズ診療拠点病院制度が果たす役割は大きいと、私は考えている。HIV 陽性者が生活圏の一般医療機関で「当たり前」に受診できる環境をめざした基盤づくりの一過程だからだ。これまで、多くの診療科を備える拠点病院が、経験豊富でネットワークもある HIV 専門医によって何とかクリアできていた問題も、HIV 陽性者数の累積的增加によって否応なく顕在化してくるだろう。先述の教育・研修はもちろん、ブロック拠点病院における積極的な医療従事者の育成・輩出など、長期的な視野に立った継続性のある体制づくりを強く望む。(高久陽介〈JaNP+〉)

拠点病院アンケート調査報告より(374件中225件より回答)



このアンケート調査は「2009年度ファイザープログラム～心とからだのヘルスケアに関する市民活動・市民研究支援～」の助成を受けて実施しました。調査報告は [http://www.janplusplus.jp/project/information/list\\_hospital.pdf](http://www.janplusplus.jp/project/information/list_hospital.pdf) からご覧になれます。

# 当事者参加型の調査プロジェクト HIV Futures

Australia

オーストラリアのメルボルンで、今までのものとは違った新しい形の調査・研究が始まっています。そのプロジェクトについて、医療と社会を結ぶ立場から、そして当事者の立場から、それぞれ紹介して頂きました。

## オーストラリアにおける当事者参加型の調査プロジェクトHIV Futuresと日本への導入

放送大学教授 井上洋士

「HIV Futures」は、オーストラリアのメルボルンにあるラトロブ大学・オーストラリア性・健康・社会研究センター（ARCSHS）が調査主体となって行なっている調査プロジェクトである。HIV陽性者の健康的状態や社会的状況など、生活全般を調査し（ただし調査の重点項目が時期により変わる）、HIV陽性者に直接・間接にフィードバックすることを目的としている。調査対象者は約1,000人のHIV陽性者（オーストラリア全土のHIV陽性者数の約7%）、実施頻度は2～3年に1回。1997年以來すでに6回実施されている。

このプロジェクトは大きくは2点の特徴があるといえるだろう。1つめは、当事者から発せられた調査プロジェクトであるということ、つまりHIV陽性者の側からその必要性が声高に叫ばれて、研究者も加わり実施に至ったプロジェクトであるという点。当事者性を十分に意識した確かな調査にしつつも、説得力があるものにするために「科学的」であることも担保しようとしている。2つめは、「研究のための研究」にならないようにしている点である。調査項目を選定するにあたって、「結果を得てどうするのか」というビジョンに照らしつつ慎重に行っている。研究者と当事者とのパートナーシップのとり方も、この特徴を実践するためには重要な課題となっている。

我々は、2011年1月に、ラトロブ大学ARCSHS及び関係機関を訪れ、特にHIV Futures調査プロジェクトのプロセスに着眼し、どのようなものであるのか、どういった問題が登場する可能性があるのかについて視察し話を聞いてきた。20年近い歴史がある現在でもさまざまな困難は存在しており、日本で即座に実施に移すにはハードルが高いとも思われた。しかし、日本で現在までにHIV陽性者支援を策定の際しばしば用いられる各HIV陽性者のナラティブな（語りによる）訴えというものも有効ではあるが、同時に、調査による数字の威力には負けるものがあるとは強く感じる事ができた。「約9割が・・・で困っている」というような統計的データ分析結果である。HIV陽性者をめぐる環境を支援的にするために、そしてHIV陽性者のヘルスプロモーションを念頭に行政などに働きかける場合に、こうした数字はパワーとなる。ぜひとも日本でも、オーストラリアの先行例に見習い、こうした調査をリサーチャーと当事者が協働で実施し、HIV陽性者の支援的な環境・社会環境の整備を推し進めていく必要があると強く考えているところである。

## HIV Futuresとその連携組織訪問より

特定非営利活動法人 ぶれいす東京/JaNP+ 矢島 嵩

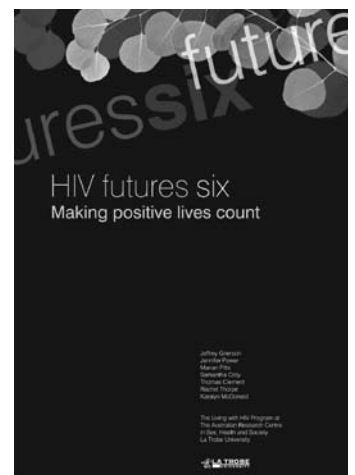
90年代にオーストラリアで、「自分たちのことを、自分たちがちゃんと知りたい」という声があり、HIV陽性者を中心としてコミュニティから上がり、それをきっかけとして当事者参画型調査HIV Futuresが始まったとい

う。今回の訪問では、HIV陽性者が当事者視点を確保しつつ客観的な事実を得るために、様々な形で調査に参画してきたことの意義を確認し、その難しさも垣間見た。また、陽性者のセックス、メンタル、薬物といった繊細なテーマについても直面し、「自分たちの真実」を大切にするという価値観の根源にも触れたように思う。

HIV Futuresは、単なる調査というよりも、ダイナミックなソーシャルアクションといった印象だ。調査結果だけが求められるのではなく、プロジェクト自体が、人々を巻き込みながら合意形成をしつつネットワークを広げて成長し、結果がコミュニティに還元されていく循環型プロジェクトだ。背景には高度に保たれたネットワークとアクセシビリティがある。当事者ネットワークがあり、医療だけでなく社会支援へのアクセスが良く、行政・医療・コミュニティの連携があり、予算がついている。

例えば、連携組織の一つであるメルボルンのPositive Living Centerは、州の陽性者の3割が利用している。ゲイ・バイ男性だけでなく、女性やヘテロ男性、薬物使用者へのサービスもあり、その種類もエクササイズや絵画教室から、奨学支援、訪問介護、注射針交換など多岐にわたり、孤立しがちな人との繋がりも保たれている。PLWHA Victoriaでは、陽性告知後間もない人、陽性/陰性カップル、妊娠女性向けのプログラム、陽性者スピーカー派遣など、地域に根ざした幅広い活動をしている。Gay Men's Health Centerでは、ゲイ・アイデンティティのない（少ない）MSMや、ゲイカルチャーのメインストリームでないニッチな層へのアプローチも展開している。どの活動も、声が大きい人のニーズだけではいことを前提としている。HIV陽性をオープンにしている人だけのためのサービスにならないよう、ゲイをオープンにしている人だけに届くヘルスプロモーションにならないよう、きめ細かい活動が地道に行われている。

こういった支援的な環境とネットワーク、そして信頼関係があるからこそ、当事者参画調査が実施できる。ひとりひとりを全体の中に埋没させない地面ギリギリの目線があるからこそ、繊細なテーマを避けずに進む勇気も持てる。調査結果とこのプロジェクトのプロセス自体が、明日のより良い環境とネットワークをもたらすことになるだろう。日本への導入を切望するとともに、プロジェクト実施の前提条件の確認や、理解の輪を広げ準備性を高めることも重要であると感じた。



「FUTURES」レポートはこちらをご覧ください。(英語サイト)  
<http://www.latrobe.edu.au/hiv-futures/>

## 「239人のHIV陽性者が体験した検査と告知」

HIV検査・予防・支援・医療に携わる全ての皆様へ！ 表題の冊子の発行とシンポジウム開催のお知らせ

239

HIV検査と陽性告知の場面は、その後もつづく長い人生にむけて重要なターニングポイントと考えられています。では、私たちHIV陽性者にとって、検査前のHIVに対する意識や検査・告知という経験は、実際にはどのようなものだったのでしょうか？

検査と告知について当事者の視点から改めて問い直すべく、JaNP+では特定非営利活動法人ぶれいす東京との共同による調査プロジェクトを、2年間かけて実施してきました。

3月31日に発行する冊子「239人のHIV陽性者が体験した検査と告知」では、昨年行われたWEBアンケートの結果分析を中心に掲載し、多くのHIV陽性者の声が反映されています。HIVの検査だけでなく、予防や支援、医療に携わる多くの方々に、ぜひ読んで頂きたい一冊です。

これとあわせて、下記のとおり同名のシンポジウムを開催します。今回の調査結果の解説とともに、HIVの専門家らと交えた検討を加え、今後の検査と告知のあり方について考えていきたいと思います。ぜひ、多くの皆様のご来場をお待ちしております。

### シンポジウム「239人のHIV陽性者が体験した検査と告知」

日時:2011年5月1日(日) 14:00～16:00

会場:新宿文化センター 小ホール

備考:事前申込および参加費は不要です。どなたでもご参加いただけます。シンポジウムに来場された方には、冊子「239人のHIV陽性者が体験した検査と告知」をお配りします。

この調査およびシンポジウムは、鳥居薬品株式会社の後援を得て実施しています。

## 第24回日本エイズ学会 HIV陽性者参加支援スカラシップ

Scholarship

日本エイズ学会に当事者が参加することは、最新の情報を入手するだけでなく自分の治療に主体的に関わっていく契機にもなるでしょう。このプログラムは学会への参加を支援します。

「HIV陽性者にも開かれた学会に」というコンセプトのもと、HIV陽性者支援団体および当事者団体によって2006年に設立したHIV陽性者の日本エイズ学会参加支援のためのスカラシップ・プログラム(交通費・学会登録料の一部負担)。様々なスポンサー企業や団体など多くの皆様のご協力を得て、2010年11月24日(水)より3日間にわたり東京で開催された「第24回日本エイズ学会学術集会・総会」には、このプログラムを通じて50名のHIV陽性者が参加することができました。

このたび、日本エイズストップ基金の助成により、学会に参加したHIV陽性者によるレポートを掲載した報告書2000部を発行しました。報

告書はエイズ治療拠点病院やNPO、行政などに発送されています。

なお、第23回日本エイズ学会以降のスカラシップ報告書は、WEBサイトでもご覧いただけます。多数の陽性者による報告から、当事者ならではの熱意が伝われば幸いです。

### HIV陽性者参加支援スカラシップ報告書

[http://www.ptokyo.com/images/Scholarship\\_Report\\_2010.pdf](http://www.ptokyo.com/images/Scholarship_Report_2010.pdf)

2010年度は、社会福祉法人はばたき福祉事業団、特定非営利活動法人ぶれいす東京および、JaNP+の3団体によりスカラシップ委員会を運営しています。

## 「HIV陽性者のための治療に関する勉強会」報告

Meeting

2010年9月～10月、東京・名古屋・大阪の3箇所で開催した勉強会に、スタッフとして参加してくれたHIV陽性者によるレポートです。

よく「HIVに関する情報が多くて何が正しいのかわからない」あるいは「ほしい情報がどこにあるのかわからない」という声を耳にする。検索結果はタイミングに応じて変わるものではあるが、試しにこの原稿を書いているタイミングで「HIV」でウェブ検索をかけると、検査・相談マップがあり、HIVマップがあり、先端医療センターのサイトがあった状況で、比較的しっかりした情報があるようにも思える。

しかしこれが、もうひとつ何か単語を付け加えることによって、けっこう変わる。検索ワードを増やすということは、より自分の関心に近い情報を求めてする行動であるのだが、加えられた単語によっては、それが実は混乱の第一歩になっている可能性を感じることもさえる。

そうした意味では、今回の勉強会は、「自分にとって必要な話」を求められた方が多かったように思う。大阪と名古屋の会場でスタッフとして参加したが、勉強会終了後も講師の方に個人の状況を説明したうえでアドバイスを求めている方も何人か見受けられた。今回開催できなかった地域でもこうした機会が生まれることを望みたいと思うと同時に、こうしたニーズを自分の眼で確かめることができ自分の活動の上でも良い学びになった。

(ryo-jin)

この勉強会は、万有製薬株式会社(現・MSD株式会社)の後援を得て実施しました。



# 陽性者の“性の健康”を考える 新プロジェクト 「Talking about SEX」

## ゲイ、バイセクシュアル向けに 東京、大阪、名古屋で開催

HIVが性感染症であることから、私たち陽性者にとってその後のセックスライフはとても大切な問題です。セックスは人間の尊厳と深くかかわる行為であり、セックスを否定したまま生きていくことは非現実的です。しかし、HIV感染という経験や性行動を制限するようなメッセージを受けることで「もう一生セックスができない」「自分はセックスをしてはいけない存在だ」という感情を抱いてしま

人も少なくありません。また、HIV陽性者が新たな性感染症にかかることは自身の健康にとってダメージとなります。

そこでJaNP+では、これまで十分ではなかったHIV陽性者の性生活に対する適切な情報提供や支援のひとつとして、ゲイ・バイセクシュアルのHIV陽性者を対象として、その性的健康を支援するプログラム「Talking about SEX (セックスについて話そう)」を新たにスタートします。このプログラムでは、同じセクシュアリティを持つHIV陽性者同士でセックスについて話し合う安全な場所と機会を提供する「交流プログラム」と、さらに深く自分たちの性の問題と向かい合うための「ワークショップ」を個別に行います。さらに、このプログラムを普及するためのファシリテーター育成研修や研究活動も並行して行います。

2011年は東京、大阪、名古屋において計16回の実施を予定しています。詳細についてはWEBサイトやE-mailにて、改めてお知らせします。

このプログラムはM・A・C財団(ニューヨーク市)の助成を受けて実施されます。

about SEX

a voice  
from  
friends  
of +

Column

「ゲイばかり  
じゃないけど」  
今日もエイズ記念日

産経新聞編集委員 宮田一雄

HIV/エイズ関係の会議などを取材していると、「同性間の性感染対策ばかりでなく、異性間をもっと重視すべきだ」といった批判が繰り返されることに驚く。

厚生労働省エイズ動向委員会の報告では、年間のHIV新規感染者報告の約7割、エイズ患者報告の約5割は同性間の性感染で占められている。ゲイコミュニティ内部の啓発努力で検査を受ける人が増えたことを割り引いても、この10年ほどの国内のHIV感染はMSM(男性と性行為をする男性)を中心に広がってきたと考えざるを得ない。

予防対策がいま、MSMを主要な介入対象とすることは当然すぎるほど当然の選択である。逆に同性間の感染に言及せずに性感染対策を強調すれば、それは異性間のとりわけ若い女性を守ろうといったメッセージに取換しがちであるという事情もある。

それでも「MSMばかり」といった批判が出ること自体、MSM対策の重要性を示すエビデンスといえそうだが、この際、そうした憎まれ口は遠慮しておこう。問題は、あれかこれか、ではなく、あれもこれも、であるからだ。日本よりもはるかに予防対策に失敗している米国を持ち上げる必要はないが、失敗の経験は真摯に対策の有効性を追求する姿勢にもつながる。その意味で米国には政府が定めたHIV/エイズの予防啓発のための記念日(Awareness day)がたくさんある

ことは参考にしたい。

- 2/7 National Black HIV/AIDS Awareness Day(黒人)
- 3/10 National Women and Girls HIV/AIDS Awareness Day  
(女性、少女)
- 3/20 National Native HIV/AIDS Awareness Day(アメリカ先住民)
- 5/18 HIV Vaccine Awareness Day(ワクチン)
- 5/19 National Asian & Pacific Islander HIV/AIDS  
Awareness Day(アジア太平洋系)
- 6/8 Caribbean American HIV/AIDS Awareness Day(カリブ系)
- 6/27 National HIV Testing Day(検査)
- 9/18 National HIV/AIDS and Aging Awareness Day(中高年)
- 9/27 National Gay Men's HIV/AIDS Awareness Day(ゲイ男性)
- 10/15 National Latino AIDS Awareness Day(ラテンアメリカ系)
- 12/1 World AIDS Day(世界エイズデー)

ね。社会全体を対象にしたものももちろんあるが、大半は人種、民族、性別、性指向、年齢などで対象にめりはりがつけられている。記念日を宣言するだけなら費用は大してかからない(と思う)。日本では6月の検査普及週間と12月1日の世界エイズデーぐらいだが、あの手この手でいろいろな記念日を設け、一年中、なにかとHIV/エイズについて話題にする機会を増やす。いわれなき「ゲイばかり」の批判を逆手に取り、そんな戦略も考えてみたい。

## 活動報告 & 今後の予定 | Agenda

- 2月5日(土)に「HIV陽性者による第24回日本エイズ学会参加報告会」を東京都内に開催。52名の方が来場されました。
- JaNP+の2010年度活動報告会を、6月に東京で開催します。また、活動報告会の翌日にあわせてHIV陽性者スピーカー研修も実施する予定です(日程など詳細は、決まり次第WEBサイトやE-mail等でお知らせします)。
- ツイッターのJaNP+公式アカウントを取得しました。  
[http://twitter.com/#!/JaNP\\_plus](http://twitter.com/#!/JaNP_plus)

## 【3月15日、JaNP+の事務所が下記住所に移転しました!】

〒162-0045 東京都新宿区馬場下町60 まんしょん早稲田401  
TEL: 03-6233-7023(平日13:30~19:30)  
FAX: 03-6233-7024

※震災の影響によりNTT東日本の工事が行えず、開通日は3月20日現在未定です。決まり次第、WEBサイトおよびE-mail配信を通じ、あらためてお知らせ致します。なお、代替手段として事務局の携帯電話080-5413-8603を備えています。JaNP+へご用件の際は、こちらへの連絡をお願い致します(平日13:30~19:30)。

## 編集後記 from editors

- 最近ではマイケル・サンデルの本を読んでいます。HIVの問題を考える上でごく勉強になる。でも仕事で疲れているときは、読書はせずミラクルひかるのモノマネ動画で癒されています。(高久)
- このたびの東北地方太平洋沖地震により被災された皆様、およびご家族・関係者の皆様にも、心よりお見舞い申し上げます。すぐには無理でも、少しずつ立ち上がっていきましょう。(神谷)
- 被災された皆様には、心より御見舞い申し上げます。この極限状態をも乗り越えられる人間のチカラを信じたいです。(加納)

## JaNP+ News Letter | No.11

編集/高久陽介・神谷浩樹・長谷川博史  
編集発行/特定非営利活動法人  
日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラス  
〒162-0045 東京都新宿区馬場下町60 まんしょん早稲田401  
[TEL] 03-6233-7023(平日13:30~19:30)  
[FAX] 03-6233-7024 [E-mail] info@janppplus.jp  
[ホームページ] <http://janppplus.jp/>  
デザイン/加納啓善 印刷/株式会社テンプリント